

「あんたさ、一体どういふつもりなの？」

窓辺から差し込んでくる眩しいほどの夕陽が、放課後の教室に四人分の影を落としていく。

私——あおみはづき青海葉月は今、クラスメートの女子三人から詰問を受けていた。

ああ、本当に……どうして、こんなことになってしまったのだろう。

「いつもいつも男子とばっかりつるんです。流石に見境なさすぎ。男だったら誰でもいいわけ？」

私の正面に立ち、腕を組んで特に鋭い視線を飛ばしている彼女は、クラスの所謂中心人物だった。あまりこういう言い方は好きじゃないのだけれど、まあ言ってしまうえばカーストトップの女子。

彼女の左右に控えている二人も、いわばこの子の取り巻きだった。

そんな三人が、放課後に私を教室に呼び出して、先ほどから何やら意味不明な発言を繰り返している。

手のひらと背筋に、じんわりと汗が浮かんだのが分かった。

「何とか言いなよ——このクソビッチ」

クソビッチ。それはもしかして、私のことを言ったのだろうか？

何でだろう。意味が分からない。ビッチというのは、誰彼構わず男と寝てしまうような、言い方は下品だけれど股の緩い女を指して使う言葉でしょ？

だったら私はそれに該当しないはず。何故なら私は生粋の処女で、それどころかまともに男子と付き合った経験すらないんだから。

そんな私に向かって“ビッチ”だなんて的外れもいいところ。だからこそ私は何か言い返してやろうと腹の奥に力を籠め、唇を開きかけて……寸でのところで、やめた。

そもそも何で彼女たちは私に対して怒りを覚え、こんな風に責め立てるような真似をしているのだろう。

その疑問を考察した時、考えられる結論はたった一つだけだった。

要するに、彼女たちは私のことが気に食わないのだ。

私、青海葉月は、小さいころから女の子にそぐわないサバサバとした性格をしていた。自分で言うのもなんだけど、どちらかといえば男の子っぽい性格をしていたように思う。だから、幼少の頃から女子と遊ぶよりも、男子と遊ぶ機会の方が多かった。だって、そっちの方が私の性的に楽しかったから。

気が合わない人と遊ぶよりも、気が合う人と遊んだほうが楽しいのは語るまでもない当然のことだろう。そして、楽しいことと楽しくないこと……どちらかを選べと言われたら楽しい方を迷いなく選ぶのもこれまた人として当然のこと。

女子と遊ぶことが嫌なわけでも嫌いなわけでもなかったけれど、単純に男子たちの方が私と気が合ったし、何より楽しかった。素の自分を晒すことができた。楽しかった。

ゆえに必然、私は女子の友達が少なく、男子の友達が多かった。

それは幼稚園、小学校の頃からずっと変わらず、だから中学に入ってから自然と男子たちとつるむ時間が多くなって、男子の友達が増えすぎて……

でも、中学生という多感な時期。思春期とも言い換えられるそんな年代だからこそ、それをよく思わない一定数の人間が現れる。

それが目の前の彼女達だった。

中学生や高校生という年代は、異性というものを人生で一番意識する時期だ。

ゆえに、男子とよくつるんでいる私は彼女達から見たら“不純物”だったのだろう。“異物”とも言い換えられるかもしれない。

そこに加えて、これは後から聞いた話なのだけれど、私はその性格から同じクラスの男子たちからとてもモテていたらしい。

私としてはそんな実感はまるでなかったし、クラスの男子をそういう目で見た覚えは一瞬たりとて無かったと断言できるんだけど……そのことも、彼女たちにとって私を見過ごせない要因の一つだったらしい。

端的にまとめると、「何男子たちに色目使って媚びてるのよ、このビッチ。気色悪いからいますぐやめなさいよ」……彼女たちが言いたいことは、こんなところだろうか。

彼女たちが私のことを敵視しているのはつまりそういうことであり……

だから、ここで正論を言い返したところで彼女たちは納得しないだろうなと私は考えた。私は真実ビッチじゃないけれど、彼女たちの中ではそう結論付いてしまっている。彼女たちの中でビッチの烙印が押され、そう決定づけられてしまった以上、その私がいくら反論を繰り返したとて、彼女たちの中の判決が覆ることは、もうこの先どうやったってあり得ない。

唇の先まで出かかっていた反論の言葉が急速に萎^{しぼ}んでいったのはそのためだ。

彼女たちには、もう何を言ったって無駄だ。言葉は、心の芯には届かない。

何故なら彼女たちは私のことが“気に食わない”だけだから。“邪魔”なだけだから。

彼女たちの胸中に満ちている真実は、たったその一つだけ。

私の弁なんて聴きたくもないし、言ったところで何の意味もなさないのでろう。だって彼女たちの真実はもう自分たちの中で完結してしまっているのだから。

ゆえに私は、この瞬間にすべてを諦めた。

正直に生きていくことを。自分らしくありのままで生きていくことを。

飾らないまま生きていって、その度にこんな風に傷つけられるのなら……最初から、傷つかないように偽装すればいい。

ありのままの自分を否定されるのはごめんだ。それはだって、「お前なんか生きてる価値がない」と言われるに等しいことだから。

しかもその生き方で、周りの人が迷惑をこうむるのなら……もはや選択の余地なんてないですよ。

だから、私は……

「——うん、分かった。これからはそういうこと、やめるね。嫌な思いさせちゃって、ごめん」

絶叫する本音を押し殺して、張り付けた仮面の笑みで目の前の女子たちに言葉を返すのだった。

こうして私は、本来の自分を作り物の仮面で隠していくことを決断する。

曰く、猫を被って生きていくことを選択するのだった。

……思えば、作り笑いが得意になったのは、この日からだったような気がする。



中学を卒業してから、私の猫かぶりはより本格的なモノへとなっていた。

まず私は、万人受けする性格というものを徹底的に研究した。

なるべく誰からも嫌われず、疎まれない、皆に好かれる高嶺の花……

本来の自分を隠し通すため、私は清楚系クール美女という仮面を被って学園生活を送ることにしたのだった。

結果として、私の猫かぶりは大成功だった。

見た目だけは清楚系クール美女の皮を被っていたものだから、誰も私の猫かぶりを疑わない。どころか、自分で言うのもなんだけど、私は男子からも女子からも絶大な人気を誇るようになる。

中学の頃では考えられないほどの人望と信頼を獲得し、高校生活は順風満帆じゅんぷうまんぱんで平和に流れていった。

……そう。逆に言えば、それだけだった。

順風満帆で平和なだけで、何も楽しくない。それが高校生活のすべてだった。

だって、みんなが見ているのは猫を被った私なんだ。偽物の私なんだ。

誰も仮面の下の私のことなんか知らない。そもそも、みんなが期待して求めているのは作り物の私の方なんだ。本来の私なんてお呼びじゃない。

どうせちよつとでも顔を出したところで、みんなはすぐさま失望の顔を浮かべるだろう。またクソビッチって糾弾するのだろう。

そう、知っていた。知っていたのよ。ありのままの自分を晒したっていいことなんかないって。

あの日の経験から、痛いほどわかっていた。誰も、ありのままの私なんか望んじやない。

猫かぶりの日々は、正直最初の頃は本当に苦しかった。

なんで自分で自分を押し殺さなくちゃならないんだろう。なんでこんな窮屈で痛い思いをしなくちゃならないんだろう。

私、ずっとこうやって自分を隠して生きていくしかないのかな？ それで本当にいいの？ それは本当に、生きていうって言えることなの？

私は、本当はどうしたいの？　これが、本当に私の望んだことの答えなの……？

何度も悩んで、家で一人枕を濡らして……心を抉る耐え難い激痛に、喘いで、呻いて、悲鳴を上げて……

……それでも、人間というものは慣れていく生き物だ。

それは心の痛みにおいても例外じゃない。

絶え間なく連続する痛みの中で、徐々に私の心は麻痺していった。痛み慣れたというより、いつの間にか感じなくなってしまうていたのだ。

猫を被るということに慣れてしまったゆえの、怪我の功名というやつなのだろう。

私にとって猫を被るという行為は、もはや呼吸をするも同然の行為になっていたのだ。

素の自分を晒したいという思いも、それに比例するように鳴りを潜めるようになって……

：

そうして私は理解する。

この世はなべて仮面舞踏会なのだと。

みんな、この生き辛い世界を上手に生き抜くために、巧妙に本来の自分を殺している。仮面を被ってそれっぽく踊って、ぼろが出ないように必死になっているんだ。

何も猫をかぶっているのは私だけじゃない。みんな上手くガワだけ取り繕って、嫌われないように、そして自分が傷つかないように、表面上だけの薄っぺらい人付き合いを演じている。

私は最初、それを悲しいことだと思っていたけれど……生きるためには必要なことなんだと割り切ってから、すんなりと受け入れることができた。

そうして、かつて感じていた苦痛や悲嘆を置き去りにしたまま、私は無色透明な青春の日々を流れ作業のように過ごしていった。

猫かぶりがバレないように。誰からも嫌われないように。本来の自分を悟らせないように。何より自分が、傷つかないように。

演じて、嘘をついて、猫をかぶって、愛想笑いをして……そんな味気ない日々の繰り返し。

そんな日々を繰り返しているうちに、私はすべての人間関係がどうでも良くなっていた。

だって、嘘まみれの付き合いに何の意味があるの？ 本物じゃないなら、そこには大した価値なんて宿らない。

だから、私は投げやりになった。人付き合いに対しても。自分の猫かぶりに関しても。どうでもいいや、って思いながらも……私は来る日も来る日も、演じ続けた。

猫をかぶった、青海葉月を。

そうして、365日の日々はあっという間に過ぎ去って……気づけば私は、二年生になっていた。

◆
彼と出会ったのは、その時だった。
始業式が終わって、新クラスの顔合わせの時。隣に座っている彼の顔を見て、私は何の
気なしに挨拶を交わした。

「青海葉月です。一年間、クラスメートとしてよろしくね」

もはや慣れすぎて顔面に定着してしまった愛想笑いを浮かべながら、私は当たり障りの
ない言葉を吐き出した。

そう、どう足掻いても一年間は付き合っていくのだ。表面上だけの付き合いとはいえ、
愛想よく接するに越したことはないだろう。

そんな私の営業スマイルを受けて、彼は。

——ああ、こちらこそよろしく。

と、人好きのしそうな笑みを浮かべて挨拶を返してくれた。

◆
これが、私と彼のファーストコンタクト。
これから、ずっと同じ時間を共にしていくことになる……最愛の人との、逢瀬の瞬間だ
った。

◆
それから、隣の席ということもあって私と彼はよく話すようになった。
話していくうちに、趣味が似通っていることも分かっていった。

特に、漫画やゲームの趣味がドンピシャだったのには驚いたつけ。

そんなこんなで、一緒に過ごしていく時間が増えていって、私達は友達という間柄に自
然となっていた。

すべての人間関係を諦めていた私にとって、この出来事はまさに青天の霹靂だった。
今までどんな人ともそれなりの距離を保って、深く関わろうとはしなかったのに……

彼だけは、いつの間にか、自分でも気づかないうちに友達という関係を構築していたのだった。

……それでも私は、自分の本当の姿を晒すという真似だけは絶対にしなかった。だって、それをしてらまた自分が傷ついてしまうから。彼が、不快になってしまうから。せっかく仲良くなれたのに、その友情を壊すことだけは絶対にしたくなかった。

……それがたとえ、嘘偽りの上で成り立っている友情だとしても。

……そう。彼と過ごす時間は楽しかった。

高校に入ってから初めて、人と接していて楽しいと感じたんだ。

だから同時に、そんな一緒にいて楽しいと思える相手に本当の自分を晒せないのは悲しいことだと、久方ぶりに胸の痛みを強烈に自覚した。

本音の自分で、本当の自分で彼と接することができたら、どんなにいいだろう……
そう思ったことは、一度や二度じゃなかったけど、でも、しょうがないわよね。

私が猫をかぶることでこの関係性が平衡に保たれているなら……そのバランスを崩す真似を、わざわざしてやる必要なんてどこにもない。

だから私は、今日も猫をかぶる。

彼との平和な時間を、一秒でも長く感じていたかったから。

その時間が、無味乾燥とした私の高校生活の、唯一の救いだったから……



「あぁっ、そっち行つたわよ！ 罾仕掛けて！」

その日の放課後、私と彼は教室に残ってゲームをしていた。

携帯ゲーム機を対面で突き合せ、画面の中のモンスターを協力プレイで狩っている。

夕陽が差し込む放課後の教室には私達しか残っていないくて、二人分の必死な声とボタンをガチャガチャと操作する音だけが賑やかに反響していた。

私の操作するキャラクターの元から逃亡したモンスターの直線上。そこには彼の操作するキャラクターが待ち伏せをしていた。

私の合図を聞き届けるや否や、彼は素早くボタンを動かし罾を設置する。

作動した罾にモンスターが動きを封じられている隙を突き、私と彼は阿吽の呼吸で武器を叩き付け、ターゲットの体力をガリガリと削っていく。

そして、やがて画面の中のモンスターは一際甲高い雄叫びを上げると、そのまま力尽きたように地面に倒れるのだった。

「やったぁっ！ クエストクリアねっ！」

二つの画面に浮かぶ「クエストクリア！」のご機嫌な文字列に、私達も思わず歓喜の声を上げてハイタッチを交わした。

「ようやく倒せたわね、私このモンスターの素材がずっと欲しくて——……ぁっ」

そして、そこで私は重大な失態に気づくのだった。

彼と過ごす時間が楽しすぎて、思わず猫かぶりを忘れてしまっていたのだ。

荒げていた声は当然彼にも聞かれていたはずで、猫をかぶっている私はそんな声を上げるキャラでは断じてない。違和感を持たれていても不思議じゃない。というか抱いているはずだ、間違いない。

あぁ、もう本当に何をやっているのか。今更こんな初歩的なミス……どう誤魔化したものかなあ、と彼の横顔をチラリと伺ってみる。

すると彼は……まったく気にした様子もなく、画面の中の倒れたモンスターを見ながらただ純粹に嬉しそうな表情を浮かべていた。

……どうやら、ゲームに熱中するあまり私の態度の変化なんて眼中になかったらしい。

ほんと安堵の息を吐く。命拾いした……彼が鈍感で本当に助かったと強く思う。

ともあれ、これからはより一層注意しなきゃ。いつの間にか外れてしまっていた仮面を被り直して、私は何でもないように彼へと話しかけた。

「——じゃあ、次はどのモンスター行きましょうか？」

努めて平静を装い、いつも通りの清楚でクールな声音を吐き出した。

そう、これが仮面を被った私の姿。人前で見せる青海葉月の姿だ。

仮面の下の本当の私のことは、何があっても気取られてはいけない。死ぬまで、猫をかぶり続けなきゃいけないんだ。

それが、青海葉月の決めた人生の渡り方。生き方。今更曲げる理由なんてどこにもあるはずがなくて……だから、気のせいなんだ。

胸の奥が、チクリと痛むような感覚がしたのは。

胸中に生じた微かな違和感を力づくで押し込めて、嘘で編み込んだ涼しい視線を彼に飛ばす。

そこにはきつと、さつきと変わらない無邪気な笑顔を浮かべた彼の姿があると信じて……いたのに。

実際にあった、彼の表情は。

「……え？」

思わず私は当惑の声を上げてしまう。

だって、彼が浮かべていた表情は……間違いなく、困惑色のそれだったから。

え……？　なんで、どうして？　どうして、そんな信じられないものを見たような顔をしているの？

私、何か間違えた？　違和感のある言動をしてしまった？　演じ方を間違えた？

私が思わず素を晒してしまったタイミングでその顔をするならまだ分かるけど、何で、それを今するの……？

だって私は今、完璧に猫をかぶっているはずで……そこを気取られたことなんて、この高校生活で一度だって無かったのに。

思わず言葉を失う私の顔を見て、何を思ったのか、彼は突然^{そっこう}相好を崩して苦笑いを浮かべた。

そして、
気遣うような優しい表情のまま、
私に顔を近づけてきて……

——無理してない？

そう、口にしていた。

……無理？ 無理つて、何のこと？ 私が、無理をしている？
待って待って、彼は一体、何のことを言っているの？

…もしかして、彼は。

咄然とする私に対して、彼は迫い打ちを掛けるように唇を動かす。すべてを包み込む、優しいそよ風のような笑みを浮かべて。

——俺の前でだけは、嘘つかなくていいんだよ。

……そう言われて、私はようやく気付いたのだった。

猫被っていたの、この人には全部バレバレだったんだって。

だから、さつき私が無意識に素の自分を晒しても、この人は何の動揺も見せなかったんだ。

こ、こちが、本、本当の、私、私だ、だつて、ず、ずっと前、前から、気、気づいて、いた、いたから。

それは果たして、いつの頃からだったのだろう。

よく話すようになってから？ 友達になってから？ それとも、もしかしたら……初め
て言葉を交わした、あの日から？

分からない。分からないけれど……分かっていることが、たった一つだけあった。

私は、この人に嫌われたくない。この人ともっと深く関わりたい。

中学のあの一件以来、私は人間関係というものを諦めていた。人と深く繋がることを諦め、ガワを取り繕って表面上だけうまく付き合えていればいいやと思うようになっていった。

痛みに慣れて。苦悩に慣れて。ようやく……ようやく猫かぶりの自分が板についてきた
と思っていたのに。

本当の自分をあつさり見破られた上に。嘘つかなくていいよ、だなんて……そんな優しい
笑顔で言われたら、私、私……我慢、できないよ。
だって私、本当は……本当は……

「……本当に、いいの？」

漏れ出た一言は、自分でもびつくりするくらいに震えていた。

怖い。怖い。また傷つけられるんじゃないかって、仮面の下の弱虫な私が悲鳴を上げて
いる。

やめろ、やめろ。どうせまた勝手に失望されて、嫌われて、彼もお前の元から去ってい
く。

失って傷つくぐらいなら、最初から手にしない方がいい。そうでしょ？

分かってる。分かってるのよ、そんなこと。

分かっている、けれど……

「本当の私、女の子っぽくないわよ」

溢れる言葉を、止められなかった。

「サバサバしてて、男勝りで。清楚のせの字もないような女の子で」

期待してしまっている自分がいる。

「嘘で塗り固めた青海葉月とは、似ても似つかない」

この人なら、もしかして、って。

「きっと幻滅しちゃう。きっと嫌いになっちゃう」

この人なら、ありのままの私を受け入れてくれるかもって。

そう、だって私はずっと……“本当”の私を見つけてくれる人を、何よりも待ち望んで
いたんだから。

ずっと、“本当”の私を、見つけて欲しかった。

「それでも……それでも、いいの？　それでもあなたは……本当の私のままでいいって……言ってくれるの？」

伏せていた視線を上げて、夕焼けに照らされる彼の顔を真つすぐ見つめた。

その時の私は、一体どのような表情をしていたのだろう。今となっては、その答えを知るのは当時の彼だけだ。今の私が知るはずもない。

でもきつと、情けない顔をしていたんだろうという予想はつく。

サバサバしていて男勝りと自分では口にしたけれど、これで結構臆病な性格だから。怖がりで、弱虫で、傷つくことを何より恐れて……だから、虚構の外装で自分を塗り固めた。もう二度と、本当の自分を否定されてしまわないように。

そんな自分の“本当”を、今日の前の彼に無防備に晒している。

心臓が破裂してしまいそうなほど脈打っている。緊張のあまり吐いてしまいそうだった。

けど……けれども、彼は。そんな私の深い不安を、一瞬で蹴散らしてしまうほどの爽快感を浮かべて……

——当たり前だろ。俺が友達になりたいのは、“本当”の青海葉月だ。作られた青海葉月なんかじゃない。

あまりにも、あっけらかんと言うものだから。

——友達になろうぜ、青海。

「……うんっ。私、あなたと友達になりたい」

差し伸べられた手を握り返した瞬間、万感の想いと共に仮面の下から大粒の涙が流れてきた。

頬を伝うこの熱い雫は、断じて作り物なんかじゃない。私がずっと求めていた、“本物”なんだと鮮烈に実感する。

こうして、私と彼は、本当の意味での“友達”となった。

彼の前でだけ素顔を晒して、本当の自分を見せられる。

彼はそんな私に失望なんてすることなく、それどころか前よりもいい意味で遠慮が無くなった。

本当の自分をさらけ出せるって、こんなにも幸せなことなんだ。そして、そんな自分を受け入れてくれる人が、隣に居るということも。

そして必然と言うべきか、以前にも増して彼と過ごす時間が比じゃないくらいに増えていった。

放課後一緒にゲームして。一緒にゲーセンにいたりして。お互いの家に行って。休みの日に、デートなんかしたりして。

……だからそれも、必然だったのかもしれない。

「……私、あいつのこと、好きだ」

一緒に過ごしていく時間の中で、気が付けば私は、彼のことを考えると猛烈に顔が熱くなるようになっていた。

締め付けられるように胸が苦しい。息が詰まる。でも、けれども、それと同じくらいの幸せな感情がお腹の底から湧き上がってくる。

寝る前の時間。ベッドで横になりながら、彼の顔を思い浮かべた。彼の声を思い返した。メッセーシアプリを開いて、わけもなく彼とのトーク履歴を見返した。二人で撮ったツーショット写真を、何度も何度も胸に抱いた。

「……好き。大好き」

大好き。大好き。好きなんだ。

口に出すたび、想いは鎮まるどころか、油を注いだ火のように一層激しさを増した。

溢れる気持ちが止まらない。バカになってしまった蛇口みたいに、際限なく甘い気持ちが零れていく。

彼ともっと一緒にいたい。彼ともっと触れ合いたい。彼ともっと、今以上の関係になりたい。

そんな願いが自分の内側で渦を巻くたびに、知らず私は涙を流した。

彼のことを想うたび幸せな気持ちになるのは確かだったけれど、それと同じくらいに胸が痛んだから。

「……誰かを好きになるって、こんなに痛いんだ」

だってそうでしょう？

彼も私のことを好きだなんて保証、どこにも無かったから。

ましてや私、こんなだし。サバサバしてて可愛げないし、女の子っぽい一面何てまるでない。

まあ、黙ってれば顔は清楚系だからそっち方面の心配はあまりないんだけど……でもやっぱり問題は内面でしょ。

どうやってこんな色気のない女に惚れるって言うのよ。ばか、ばか、私のばか。

こんなことならもうちよつと女子力磨いておくんだった……

「……そうよね。私なんかが、あいつに釣り合う訳がない」

本当の私なんかを受け入れてくれた、とても素敵で優しい男の子。

あんないい男、他の女子が黙っていないだろう。だったら私なんかよりもよっぽど素敵な女の子なんてこの世にごまんと溢れているわけだから、その子たちと結ばれる方があいつも幸せ……

「……嫌。そんなの、嫌よっ……」

私以外の女の子の横に立つあいつのことを想像して、胸が先ほど以上に切なく締め付けられた。

身を裂くような激痛に、思わず全身を抱いてしまう。

いやだ。いやだ。あいつが私以外を選ぶなんて。

こんなの、傲慢だって、ワガママだってわかっているけど……それでも止められない。好きって気持ちに、嘘はつけない。今まで上手につけていた仮面を、うまく被ることができなかった。

もう本当に……何なのよ、あいつ。

——俺の前でだけは、嘘つかなくていいんだよ。

あの日の言葉が、夕暮れに染まる教室と共に脳内にリフレインする。

……嘘つかなくていい、って。あんたねえ……

「もうとつくに、あんたの前で嘘つくなんてできなくなってるっての……ばーか」

スマホの画面に映るあいつの笑顔に向けて、涙混じりの悪態をぶつけた。

いつの日か、私とあいつの人生が重なる日が来ますように。そんな大それた願いを、心
の中で呟きながら……



——好きです。俺と、付き合ってください。

夏休み明け。二学期が始まって間もない頃。

夏の匂いがまだ色濃く残る放課後の教室で、私は彼に告白されていた。

「——っ……え……っ？」

彼の口から発せられた言葉の意味が分からなくて、思わず呆けた反応をしてしまう。
いや、だって待って……あいつ、今、私のこと好きだって……？

実感が抱けない。現実感がまるでない。自分は今、都合のいい夢の中にいるのではないかと錯覚しかけてしまう。

遠くでひぐらしの喧しい大合唱が響いてきて、耳朶を殴りつけた。それで私は、これが夢ではないということを強く自覚した。

ふと彼の顔を覗いてみる。彼の顔にはちょうど窓から差し込む朱色の夕陽があたっていて、その頬を真っ赤に染めていた。

……けれどきっと。私の自惚れなんかでなければ……その顔が赤くなっていたのは、残夏が滲む夕陽のせいだけじゃなかったはずだ。

何よりも、私に向けられる真摯な瞳が告げている。

この想いは本物だと。お前のことが、心の底から好きなのだと。

そんな真つすぐに、熱烈な想いに撃ち抜かれたら……ああ……返す答えなんて、決まりきってるでしょ。

「——私も、あんたのことが好き。大好き。

……こんな私でよければ、その……こちらこそ、よろしく願います」

……その時のあんたの表情を、私はきつと生涯忘れることはないでしょうね。

泣き笑うようなくしゃくしゃな感情を浮かべて、感極まったように私のことハグしてきて……

おお、滅茶苦茶熱烈じゃないって焦ったもんよ。若干引いたかも。

ふふ、嘘よ嘘。本当にうれしかった。

ありのままの私を見つけてくれて。ありのままの私を受け入れてくれて。

そして――

「……ありのままの私を好きになってくれて、ありがとう。私今、本当に幸せ」

確かに感じる温かい熱を抱き返しながら、こうして私達は恋人になったのだった。



「……それからの時間は飛ぶように過ぎていったわね。
本当に……色々あった。一緒にゲームして、沢山デートもして……その分、沢山喧嘩もしてさ……」

でもその度に仲直りして、ああ、やっぱり私はあんなのが好きなんだなあって再確認して……

え、アンタも？ ふふ、やっぱり気が合うわね。私達。

エッチなことも沢山したわねー。そういえばさ、ほら、覚えてる？ 高校の卒業記念で一緒に旅行した時さ、宿泊先の旅館で浴衣姿の私見て、あんなが我慢できなくなって急に布団の上に押し倒してきてさー。でも私が負けじと押し倒して、逆に襲っちゃったってやつ。

ふふふつ、あれ今考えると傑作だったわよねー。あの時のあんなの顔、可愛かったなー」

からかうように私が言うと、隣に居る私の大好きな人……あんなは、唇を尖らせながら照れ隠しをするように後頭部を掻いた。

ふふ。まったく、なんて話をしてるんだろう。今日は人生における一大イベントの日だというのに。

……そう。今日は、人生でたった一度の大切な日。

私と彼の人生を一つに繋げる、大事な儀式の日。私と大好きな人の――

『それでは、新郎新婦のご入場です』

マイク越しの開会の一言が、会場全体に響き渡った。

その合図を聴いて、私は隣に立つ彼へ改めて視線を飛ばす。

この世の誰よりも愛している、あんなの方へと。

「――行くわよ、新郎様。ほら、背筋伸ばしてちゃんとしなさいっ」

弾むように言い放ち、翻る白磁の衣装を横目に見ながら、私はあんなと腕を組んだ。

タキシード越しにあんなの腕の温かさが伝わってきて、ドキリと心臓が高鳴ってしまう。やっぱり好きな人の身体に触ると言うのは、何回やったって慣れやしない。何度だって胸が高鳴るものだ。

それはあんたも同様みたいで、まるで初恋に落ちた少年みたいに初心^{うぶ}に頬を染めている。

その反応を見て、私は……本当に、この人を好きになって良かったと、もう何度目になるか分からない想いを深々と噛みしめた。

二人揃って頬を染めていると、そんなのはお構いなしに目の前の扉がゆっくりと開かれていく。

扉が完全に開け放たれる頃、割れんばかりの拍手喝采が、私達のすべてを祝福してくれていた。

そんな万雷の祝福を一身に浴びながら、私達は再び目を合わせる。

そして、互いに微笑み合うと同時に、まったく一緒のタイミングで足を踏み出すのだった。

……一歩一歩、ゆっくりと。あんたの温もりと祝福の声を感じながら、噛みしめるようにバージンロードを踏みしめていく。

扉から祭壇までのこの道のりは、私達の今までの人生を表しているようだった。

長いようで短かった……二人で過ごしてきた時間。その道のり。

だからこそ私は、赤い絨^{じゅうたん}毯を踏みしめるたび、あんたとの思い出一つ一つに思いを巡らせて、万感の想いで噛みしめていく。

……あんたと出逢った日のこと。あんたが私に「嘘つかなくていいんだよ」って言ってくれた日のこと。あんたが私に告白してくれた日のこと。初めてデートした日のこと。

夏休みのこと。結婚しようって言ったこと。プロポーズされた日のこと。

全部、全部全部……一つ余さず、覚えてる。

それくらい、大事で掛け替えない思い出。全部大事。それくらいに、あんたのことを愛してる。

バージンロードをゆっくり歩きながら、あんたの横顔を盗み見る。

ステンドグラスから差し込む日差しを受けるタキシード姿のあんたは、本当に心臓が飛び出ちゃうくらい格好良かった。

……もう。本当に、何回惚れ直させる気よ。ドキドキするこっちの身にもなりなさいってーの。

今すぐ抱き着いてキスしたい衝動に駆られるけど……それは我慢。

だって、本当の私を見せるのはあんただけって決めてるもの。みんなの前では、ね。本当の私なんか、晒してやんない。

本当の私は、あんただけのものなんだから。だから絶対、手放さないでよね。って言っても、私もあんたのこと、手放してやる気なんて毛頭ないけど。

「それではお二人とも、足元にお気をつけて」

そして気が付くと私達は、祭壇の前まで足を進ませていた。

柔和な笑みを浮かべる神父様の言葉に従い、ゆつくりと段差に足を掛けて壇上上がる。

見るからに優しそうな初老の神父様は、私達の顔を交互にゆつくりと見つめると、歌うように言葉を並べ始めた。

「新郎——あなたは、その健やかなるときも病める時も、彼女を心から愛し、真心を尽くすことを誓いますか？」

——はい、誓います。

あんたの泰然とした声が耳の中に溶け込んでいく。

形式的な誓いの言葉だけれど、首肯したあんたの意思は、紛れもない本心なのだと、その声を聴いただけで私にはわかった。

ああ、本当に。あんたを好きになって、よかった。

「新婦、青海葉月様。あなたは、その健やかなるときも病める時も、彼を心から愛し、真心を尽くすことを誓いますか？」

少し眉尻の下がった神父様の瞳が、私の視線と重なった。

優しいけれど、嘘は許さないという誠実そのものを鏡に映したような眼光。

そんな視線にさらされても、私はちっとも怖くないし、怯まなかった。

確かに私は、嘘だらけの猫かぶり女だけれど……それでも、彼に対してだけは、嘘がつかない女だから。

つきたいとも、思わない。

「——はい、誓います」

だって、こんなにも彼のことが好きなんだから。大好き。大好き。愛しているんだ。だから嘘偽りのない、等身大の気持ちを籠めて、私は神父様へ誓いの言葉を捧げた。

私の瞳を覗きこむ神父様は、やがて満足そうに口角を緩ませる。

どうやら、神父様のお眼鏡に敵ったらしい。まあ、当然ね。だって、彼に対する思いだけは、紛れもない本物なんだから。

「それでは、新郎新婦。誓いのキスを」

神父様に向き合っていた私達は、その言葉を皮切りに互いの方へ身体を向ける。

熱い視線が突き刺さる。想いの丈が伝わってくる。

愛しているという気持ちが、痛いほどに伝わってくる。

……今更だけど、本当に私達、心の底から愛し合っているんだ。

私のことを愛してくれているのは誰よりも知っていたつもりだったけど、やっぱり、改めて気持ちを知らるとどうしたって嬉しくなってしまう。年甲斐もなく、心臓がドキドキして止まらない。

猫をかぶるのはあつという間に慣れたけど、こればかりはいつまでたっても慣れないなあ。

でも、それでいいんだと心の底から私は思う。

だってそれくらい、私達はお互いのこと、深く愛し合っているということだから。

いつまでもときめく鼓動を感じてしまうくらい、お互いのすべてを愛している。

だから私は、微笑むあんたへ一歩踏み出す。

胸に飛び込んで、肩に掴みかかった。そんな私を、あんたは優しく抱き留めてくれる。

一気に顔を近づけた。唇と唇が触れてしまいそうな距離。キスしようとしてるんだから、当たり前だけど。

この距離感は、何年たっても、何回繰り返しても、やっぱり照れてしまう。でも、同じくらい気持ちが弾んでしまうのもまた事実で。

そんな、鼓動が高鳴る距離を保ったまま、私はあんたの両目を見つめて、そつと呟く。

「ねえ。大好き。愛してるわよ」

今まで何度も伝えてきて……これからも、何度だって伝えていきたい想いを……たった一人、大好きな人^{あんた}に向けて。あんただけに、聴こえるように。

「——んっ」

熱く、深く。別々だった私達の人生^{みち}が一つに重なるように、私達の唇が繋がった。

その瞬間、祝福の音色が私達の世界に鳴り渡る。

おめでとう。おめでとう。いつまでも幸せに、と——

言われなくても、幸せになってやるわよ。ていうか、あんたと一緒なら、この先の人生……どこまでも幸せな気持ちで駆けていけると信じてる。

だって、ねえ、そうでしょう？

こんな嘘だらけの世界で、あんたは本当の私を見つけてくれた。

こんな嘘だらけの世界で、あんたは本当の私を好きだと言ってくれた。

こんな嘘だらけの私を……あんたは、私の隣がいいって、選んでくれたんだ。

そんないい男と一緒になんだから、幸せになれなきゃ全部嘘でしょう？

だから、ねえ。何度でも伝えるわね。だって本当に、何回言っただって伝えきれないから。

「愛してる。ありのままの私を好きになってくれて、ありがとう。私今、本当に幸せ」

猫かぶり^{かめん}を外した私の満面の笑みと、それに応えるあんたの笑顔だけが、私達の世界を包む幸福な真実だった。

——大好き。いつまでも、ずっと一緒にいましょうね。

